

46 戦後占領期における「公衆衛生列車展覧会」に関する考察

— 県軍政部レポートの内容 —

田中 誠二¹⁾、杉田 聡²⁾、丸井 英二³⁾

¹⁾新潟大学人文社会科学系, ²⁾大分大学医学部, ³⁾人間総合科学大学

【研究の背景】本報告は、占領期日本における「公衆衛生列車展覧会 (Public Health Train Exhibit)」に関する研究の続報である。公衆衛生列車展覧会とは、衛生知識の普及・啓蒙を目的として列車内に公衆衛生・福祉に関する模型や写真、ポスターなどを陳列し、全国の主要都市を巡回展示した催しである。1947(昭22)年11月1日に東京・原宿駅で開催された大々的なオープニング・セレモニーのあと、関東地方での運行を開始し、その後、九州地方、近畿・中国地方、北海道で巡回展示した。資金難を理由に計画は中断され、結果的にこの企画は1年ともたずに終了することとなったが、当時の記録をていねいに追っていくと、各地の停車駅で地元の医師会や保健所職員が列車の周辺にテントを設営し結核検査や性病相談、スライド上映会を開催する様子や、列車の到着スケジュールにあわせて「衛生週間」を企画しまちぐるみで健康イベントを展開した事例など、公衆衛生列車が人びとに歓迎されるとともに、さまざまな形で広がりをもつ衛生教育活動の契機ともなったことが読み取れる。

【目的】本報告では、公衆衛生列車を迎え入れる立場にあった各県(に駐在の)軍政部がこの展覧会をいかに把握し評価したか、彼らが記したレポートの内容を検討し考察する。

【資料】国立国会図書館憲政資料室に所蔵されているGHQ/SCAP文書のうち、公衆衛生福祉局(PHW)の記録文書を対象に衛生教育関連の史料を探索・収集した。本研究では、[SHEET No. PHW 01333-01348]に含まれる千葉軍政部(CHIBA MILITARY GOVERNMENT TEAM)と栃木軍政部(TOCHIGI~)によるレポートを主な検討材料とした。

【結果と考察】1947(昭22)年11月に出発した公衆衛生列車は都内4駅で約半月の展示を終えたあと、千葉県内に入り本千葉駅(千葉市)にて4日間、新生駅(銚子市)にて3日間の展示を行った。記録によると本千葉駅では計14,200人、新生駅では計12,500人もの観覧者が詰めかけた。千葉軍政部のレポート(29 November 1947)には、県衛生当局が公衆衛生列車を迎えるにあたってその宣伝や医師・保健婦の手配など非常によく働いたと評価する記述がある。公衆衛生列車そのものに対しても展示品が豊富で魅力的であることを称賛し、非常に優れた公衆衛生講座であると高く評価した。しかし、その一方で、列車の日本人スタッフの振る舞いに対してはかなり厳しく批判し、展示品に関して十分な知識を持っていない、占領軍のスタッフの前ではうわべだけのレクチャーをする、などと酷評した。さらに注目すべきは、この展覧会の改善策の1つとして「公衆衛生マインドを持ったアメリカ人を責任者または監督者として乗員スタッフのメンバーとする」ことを提案している点である。これまでの調査を振り返ると、展覧会の企画・実施にあたって占領軍側の担当部局であったPHWやCIE(民間情報教育局)は、いわゆる「間接統治」の原則を守り国民に対して「直接的に」介入するやり方をとっていない。展示品の作成・準備から実際の列車の運行、観覧者に対する解説などすべてを日本人の手によって実施させることを前提に関与してきた(しかし、例えばこの展覧会に使用した列車の側面には「Public Health Train」の英字表記とともに、連合軍専用客車を意味する「白帯」を残したまま運行するなど、占領軍の影響力を「間接的に」国民に知らしめようと意図したことが推測される)。〈PHW・CIE〉と〈軍政部〉のあいだに微妙な見解の違いが存在したように見える。当日は実際の軍政部レポートを示しながらより詳細に考察する。

本研究はJSPS 科研費JP16K17384の助成を受けたものである。